

でんぼうじのだ
伝法寺野田遺跡

所在地 一宮市丹陽町伝法寺地内
調査理由 五条川右岸流域下水道整備
調査期間 平成 14 年 4 月～7 月
調査面積 1,540 m²
担当者 石黒立人・川添和暁



調査地点 (1/2.5 万「一宮」)

調査の経過 本遺跡は、西から南へと流れが大きく蛇行する、五条川右岸の自然堤防上に立地する。一宮市と岩倉市との境にある本遺跡周辺には、近接する権現山遺跡をはじめ、元屋敷遺跡・北島白山遺跡・大地遺跡などが所在し、縄文時代後期以降の各時代の遺跡が展開する地点として注目されている。

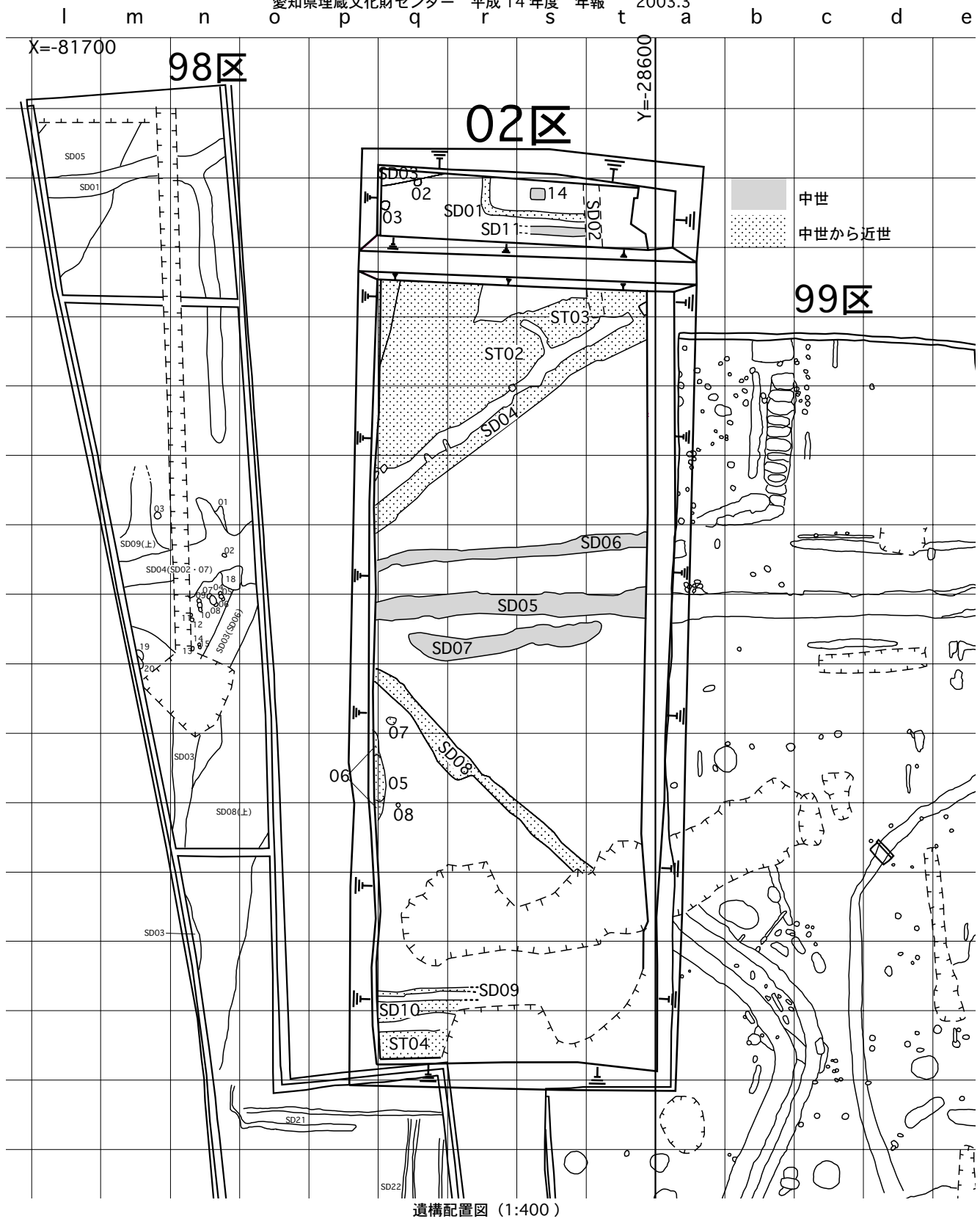
調査は、五条川右岸流域下水道整備に伴う事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。過去 98・99 年度にも調査が行われており、弥生時代から古墳時代、古代・中世にわたる複合遺跡であることが明らかになっている。98 年度には、弥生時代中期中葉と考えられる水田跡が検出され、大畦畔の脇から無茎銅鏃が出土している。99 年度には、同時期とされる溝や竪穴状遺構の検出が報告されている。今年度は 98・99 両年度調査区に挟まれた部分が、調査対象区となった。

調査の概要 検出された遺構には、中世以降の溝数条、中世の方形土坑、近世の畦畔・溝などがあり、方形土坑を除いては、水田耕作に関わる遺構と考えられる。溝および畦畔の軸線が真北に対して 45 度に振るものと直交するものの二者が見られ、時期の違いが想定される。

調査区南端では、灰黄色シルト層・黒褐色粘土層 (98 年度調査の VII 層か) の堆積が見られた。灰黄色シルト層はマンガン斑が多く見られたことから水田耕作に伴う堆積土であった可能性が考えられるものの、水田跡の検出までには至らなかった。この層からは、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物が出土している。黒褐色粘土層は出土遺物は微少であり、形成時期などは不明である。旧地形は北に向かって高くなっているものの、近世の畦畔脇や畑と考えられる高まりなどには黒褐色粘土層の部分的な残存が見られた。元来調査区全体に黒褐色粘土層が堆積していたものが、後世の耕作により削平されたものと考えられる。



調査区全景 (北より)



遺構配置図 (1:400)

ま と め 調査の結果から、当地は弥生時代以降、耕作が継続して行われていた場所であると考えられる。灰黄色シルト層での水田跡の未検出は悔やまれるところだが、今回の調査において弥生時代中期中葉に比定できる遺物が見られないことは、過去の調査成果を考える上で参考となるであろう。

(川添和暁)